

# よい社会のイメージの構造に関する研究

——まちづくり活動の盛んな地方都市住民と首都圏住民の比較——

○竹内潤子<sup>1</sup>・今関仁智<sup>1</sup>・玉利祐樹<sup>2</sup>・井出野尚<sup>1</sup>・竹村和久<sup>3</sup>

(<sup>1</sup>早稲田大学大学院文学研究科, <sup>2</sup>東京大学医学部附属病院緩和ケア診療部, <sup>3</sup>早稲田大学文学学術院)

キーワード: 多元価値, よい社会, イメージ

Study of image structures about a “good society”: A comparison between the people living in a local city where the movement of the town development is effective and those living in the capital sphere.

Junko TAKEUCHI<sup>1</sup>, Masatoshi IMASEKI<sup>1</sup>, Yuki TAMARI<sup>2</sup>, Takashi IDENO<sup>1</sup> and Kazuhisa TAKEMURA<sup>2</sup>

(<sup>1</sup>Graduate School of Letters, Arts and Sciences, Waseda University, <sup>2</sup> Department of Palliative Medicine, The University of Tokyo Hospital, <sup>3</sup>Faculty of Letters, Arts and Sciences, Waseda University.)

Key Words: pluralistic value, good society, images

## 目 的

社会評価の指標としてこれまで中心となってきたのはGDPを始めとする経済的価値であるが、一方で、近年ではGNH (Gross National Happiness; 国民総幸福量) の取り組みに注目が集まるなど、幸福感といった経済的価値以外の価値の重要性も指摘されており、社会生活において価値は多元的であることが示唆される。

価値研究においては初期の段階から価値の多元性が指摘されており、理念的な類型を元にいくつかの尺度が構成されてきた。こうした尺度を用いて得られた集団データに対しては、因子分析や多次元尺度構成法のような多元性を前提とする多変量解析が行われてきた。一方で、個人が多面的な価値を持っているかどうかの実証的検討はこれまで行われておらず、価値の構造の個別的測定、及びその方法論の確立もなされていない。そこで、竹内・井出野・玉利・今関・竹村(2013)は、個人内の価値構造を反映する測定手法として「コルクボード・イメージ・マッピング法」を開発した。本手法は、多元的価値を構成する事象を各調査参加者が挙げ、それらをコルクボード上に自由に布置することで、その人の持つ価値構造を可視化する手法である。竹内他(2013)は価値の対象に「よい社会のイメージ」を用い、大学生 56 名を対象として開発手法の適用を行った。

本研究では、首都圏と地方都市での住環境の違いが「よい社会のイメージ」に差異をもたらすことを想定し、特に地方自治等への応用的利用の観点から、まちづくり活動が盛んな地域の人々の持つ、望ましい社会についての価値構造を探索的に明らかにすることを目的とした。

## 方 法

まちづくり活動が盛んな地域として平成 24 年度地域づくり総務大臣表彰を受賞した富山県富山市を選定し、コルクボード・イメージ・マッピング法(竹内他, 2013)を実施した。

**調査参加者:** 富山県富山市の市民 21 名(男性 11 名, 女性 10 名)であり、平均年齢は 40.14 歳(SD=17.78 歳)であった。また、比較対象として首都圏住民 20 名(男性 11 名, 女性 9 名, 平均年齢 43.40 歳(SD=13.32))にも調査を実施した。

**手続き:** コルクボード・イメージ・マッピング法の手続きは以下の通りであった。(1)価値の主要項目の抽出…「よい社会」だと思ふ事柄について 10 項目自由記述してもらった。各項目は名刺サイズのカードに記入するよう求めた。(2)コルクボード・マップの作成…10 枚のカードの上部にそれぞれピンを刺し、コルクボード(直径 60cm の円)の上に自由に布置してもらった。(3)半構造化面接…(a)なぜそのような配置にしたのか、(b)内容的にまとまっている部分はあるか、(c)上下及び左右の軸を考えると何か意味が見出せるか、を回答してもらった。以下では、調査参加者が(b)で「まと

まっている」と回答した価値項目群をまとまりと呼ぶ。

分析にあたっては、予備調査で得られた 28 のカテゴリ(以下、価値カテゴリ)を使用した。各調査参加者によって命名されたまとまりを価値カテゴリに分類し、その出現頻度を集団ごとに比較した。軸の内容についても、出現頻度を集団ごとに比較した。また、各価値カテゴリの項目がコルクボード上で布置された点の極座標を測定し、中心から各点に向かう単位ベクトルの偏角を用いて、方向統計学に基づき平均方向と標準偏差を算出することで、布置の傾向を分析した。

## 結 果 ・ 考 察

**まとまり:** 富山群では首都圏群に比べて「協調性」「自然環境」「人間関係」「道徳性」「自由」「経済」「平和」「明るさ」「伝統文化」を挙げた人の割合が 5%以上多く、「政治」「共生」「社会保障」「安全」「平等」「労働環境」「達成」「子ども」「ゆとり」を挙げた割合は 5%以上少なかった。

**軸:** 2 集団全体で 28 名(68.3%; うち富山市民 11 名, 首都圏住民 17 名)が使用したと回答した縦軸について、両群で重要度を用いた人が最も多く(首都圏住民: 6 名(30%), 富山市民: 4 名(19%)), 次に多かった回答が規模に関する軸であった(首都圏住民 3 名(15%), 富山市民 3 名(14.3%))。

**布置の傾向:** 富山市民群で回答の出現頻度が 5 回以上であった価値カテゴリのうち、標準偏差が小さかった上位 5 カテゴリの布置の傾向は表 1 の通りであった。

表 1 布置の傾向の比較

カテゴリ	群	n	θ	v	カテゴリ	群	n	θ	v
幸福	富山	6	137.8°	63.5°	共生	富山	6	136.1°	83.7°
	首都圏	2	-164.0°	91.9°		首都圏	9	-96.6°	72.8°
平等	富山	5	-95.9°	65.6°	教育	富山	6	179.8°	83.8°
	首都圏	15	-13.3°	133.2°		首都圏	7	142.5°	95.4°
道徳性	富山	12	7.4°	78.1°					
	首都圏	4	49.5°	73.2°					

注) n: 出現頻度; θ: 平均方向; v: 標準偏差

以上の結果から、富山市の参加者は「協調性」「自然環境」といった内容を重要な価値として捉えており、「政治」「共生」等は比較的重視していない可能性が示された。また、富山市住民と首都圏住民では、価値の構造化の際の基準は比較的共通している可能性が示唆された。布置の傾向については、「平等」は富山市住民では下の方に集中する傾向にあるのに対して、首都圏住民では一定の傾向は見られない、といった差が見られ、価値の空間における意味が集団ごとに異なる可能性が示された。

## 引用文献

竹内潤子・井出野尚・玉利祐樹・今関仁智・竹村和久(2013). 物語を用いた多元的価値構造の測定法—「よい社会」のイメージの個別分析— 知能と情報, 25(2), 641-650.